

## 仮名垣魯文『松飾徳若譚』ノート

Research on "Matsu-kazari-Tokuwaka-Monogatari" which is  
the novel written by Kanagaki Robun in early stages of Meiji

山本和明

### はじめに

明治の御代となってまだ間もなき明治四年というと、前年に万笈閣より『西洋道中膝栗毛』を刊行しはじめた仮名垣魯文が、引き続き『安愚楽鍋』を刊行した年であった。両作は魯文を代表するものとして今日位置づけられている。その一方で、この時期に徳川氏祖歴代のことを素材とした『松飾徳若譚』が刊行されたことはあまり知られていない。従来あまり取り上げられることのなかったこの作品について、代表的な見解は次のようなものである。

しかし、この作品（山本注―『安愚楽鍋』）で見られたものは、あくまでも江戸の滑稽本風の表面的を現象描写であつて、浅薄な文明開化風俗を批判し、風刺するまでにはいたらなかったが、それが魯文の限界ともいえた。そんな魯文なればこそ、同じ明治四年に、『松飾徳若譚』と題する田辺南竜の講釈ダネによる大時代な草双紙も刊行していた。

この作品は、新田氏、足利氏が争った建武の時代を背景にして、奥河広忠朝臣の嫡子徳若丸をめぐり、逆賊戸田登五郎、勇臣金田壮八郎、寛平三郎などが交錯する月並な作品だった。

(興津要『仮名垣魯文—文明開化の戯作者』平成五年六月・有隣堂、八三・八四頁)

「講釈ダネによる大時代な草双紙」「月並みな作品」との評価は、思うに少し修訂を要するのではないか。何よりもその講釈種という理解において、また「月並み」という理解において、である。稿者は今般、リプリント日本近代文学第4期130『松飾徳若譚』(国文学研究資料館編・平凡社発行)の解題においてそのことを指摘した。紙数の都合もあり、結論のみ示したにすぎない。そのため本稿では、『松飾徳若譚』の内容紹介かたがた、今少し詳述したい。

## 梗概紹介

『松飾徳若譚』は六編十二冊からなる。仮名垣魯文作、錦朝楼芳虎画。初編・二編・五編の筆耕は武田交来で、青盛堂加賀屋吉兵衛からの刊行である。本作は好評を博したようで、幾度か刷り増しされたことが確認されている。

その刊行だが、初編二編三編袋に「辛未春」(初編序に「明治四稔辛未初春」、二編序に「明治辛未春」、三編序に「未孟春」とあり)、四編も「辛未春」(上巻見返し。序に「明治四未歳新板発兌」とあり)で、明治四年の刊行。五編は「壬申盆夏」(下巻表紙。上巻見返しに「壬申夏」とあり)で明治五年、六編は表紙に「戊の春」とあり、少し間隔を置いての明治七年版行であった。ちなみに改印はというと、初編・二編が「午九・改」で、明治三年九月改。三編が「午十・改」とあり、明治三年十月改。五編が「未九・改」で、明治四年九月改。六編が「酉一」とあり、明治六年一月改である。疑問の残るのは四編。先述の如く四編は「辛未春」とある一方で、下巻十九ウ二十オの本文に「天文十一年壬寅年十二月廿六日寅的一天徳若丸誕生の図」を掲げ、「作者曰此回を綴るをり惟るに時は庚午の十二月廿六日夜也最



も不思議な因縁ならずや」と記す。仮にこの言を信用するならば、明治三年十二月二十六日段階での執筆となる。それを「辛未春」に刊行とするには少し無理があるろう。ちなみに四編下巻改印は「未正改」である。

※ ※

さて、その内容である。六編十二冊と大部ゆえ、少々煩雑だが次章との関わりもあるため呈示しておく。ご寛恕いただきたい。各編上下巻の別を冒頭に示す。

〔初編上巻〕

足利義教が植相憲美に命じ鎌倉の足利持氏を亡ぼした永享十一年の戦も果て、持氏に従った寺田（註一口絵では新田）右京亮源有近・嫡男近藤父子は、植相による追討の手をのがれ、上州とくなが村に忍んでいた。

ある日、当家にご恩あるしほ田隼人の注進により、植相の討手二人が遣されたことを知る。雑兵等を切り捨てつ

つ、有近は、隼人に証文を与え、永享十一年三月初旬に故郷を立出。下野・常陸の奥まで遍歴を重ね、路頭に迷う身に堕ちる。途中、かつて恩顧の持氏近臣、仁木黨助を思い出し、彼を頼りに信州深志へと尋ねて行く。

〔初編下巻〕 深志にて黨助を探し求めるが見つからない。路用も尽きた霜月末つ方、吹雪の中、辻堂にて寒さをしのぐ折、手負いの大熊が襲って来た。近藤少しも恐れずねじ伏せて、熊を仕留める。二人は里に行き、路用の小金を得ようとしたところ、獵師が現れ、その熊の所有を巡って問答となる。ふと獵師より名乗りがあり、その獵師が仁木黨助と知れる。これより黨助の家に逗留した有近父子であつ

た。師走に至り、黨助は、兎一羽を得、永享十二年庚申の正月元日、父子に兎の吸い物を奉る。とくなが家の吉例、元旦兎の吸い物は、この因縁より始まる。父子は弥生の末まで黨助のところを過ぐす。ある日、松本にて、当国下向の相州藤沢清浄せいじやうくわうじ光寺の遊行上人と対面。二人は剃髪し、有近は松阿弥しやうあみ、近藤は訥阿弥とつあみと法号を授かり、上人に随行する。

〔二編上巻〕 五年余、遊行上人とともに諸国を遍歴。武蔵国しばさき村の、平将門を祭る神田明神にて、松阿弥、通夜すること三七日。満願に至り、東の空より翁来たる。「身の成り出づるは近藤に嗣ぐの後にあらん」とのお告げであつた。越後に赴き、嘉吉二年十月、有近卒去。悲しみの中、訥阿弥は遊行上人に随行し、三河国常盤ときはの郷に至る。西三河の赤井五郎エ門（註）初編口絵では五郎左エ門の所に宿る時、訥阿弥病重く、遊行上人詮方なく五郎エ門に託して出立。訥阿弥全快後、五郎エ門の娘お梅は、訥阿弥を思い染め、ひそかに手紙を送る。父の遺言、祖父より継ぐ大志ゆえ、子孫を残すを要かなめとする訥阿弥は忍び入り、お梅はいつしか身籠もる。共に家を出ようとしたところ、父五郎エ門が踏み込み、二人を弑ころせんとする。訥阿弥は、頸に掛けたる家の系図の一軸を見せる。

〔二編下巻〕 五郎エ門、訥阿弥が源家の正統なることを知り、自身、訥阿弥祖父に随つていた事を語る。すぐに赤井の家を嗣ぎ、還俗し次郎三郎近藤と名乗る。嘉吉三年十二月、お梅、男子徳太郎出生。その後お梅は病没する。ある時、常盤村の郷士太郎右エ門は、近藤を招き饗応し、自身の娘お松との婚姻を求める。近藤、再び出家となるが、太郎右エ門は、五郎エ門に対面、談判に及ぶ。近藤、これより赤井郷を徳太郎に譲り、自身は常盤の家名を継ぎ、お松と婚姻する。近藤はうち続きたる兵乱に、郷民等を従え、旗を挙げる。近郷を攻伐し、三河の郡村を遵わせる。常盤に移り住んで設けし嫡子次郎丸泰近やすちか、弱年ながら武勇をあらわす。ここに当国菅沼の村主定なほという者、近藤に従わぬゆえ、長禄二年四月六日、菅沼攻めとなる。こん田兄弟、定なほを生け捕り、泰近の前に引き据える。定なほ降参。近藤の威名、遠近に奮うが、十年余を経た応仁元年四月廿六日、近藤身罷る。その中陰果てし頃、信州深志の仁

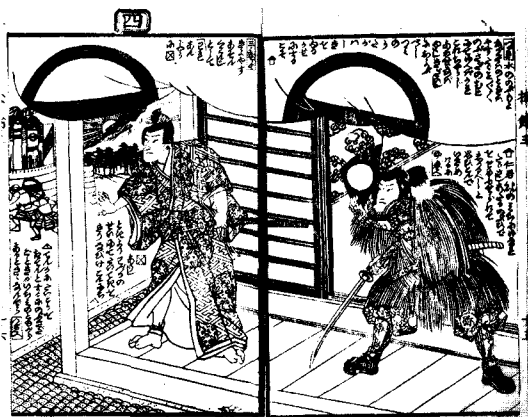
木黨助、御家人となる。その頃、洞院とういん重相じゆうさう実輝卿、三州に配流。泰近は心を尽くし、実輝と懇ろに交わる。

〔三編上巻〕 実輝卿は都より勅免のご沙汰があり、帰洛に及ぶ。その酒宴の節、泰近の由緒を問い、凡人にあらざる委細を知る。泰近は都まで実輝卿を送る。実輝昇進の後、泰近を三州の目代に任用。泰近、実輝の館に赴き、礼を述べた折、実輝の妾腹の息女顔世姫を賜り、三河に戻る。同国岩津・岡崎に城を築き、岩津には次男寺田冠者延満のぶみつを置き、家門益々の広がりをもせた。泰近、文明四辰年の九月廿二日往生を遂ぐ。家督を譲られた寺田冠者延満は智勇兼備の者で、程なく尾張国小田信定のぶきた入道げつがん巖の旗下、安祥城主柳田定教さだのりを討ち取り、延満の武名轟く。子福者であったが、長享二年七月廿二日逝去。その次男寺田左京亮近忠ちかたが家督を継ぐ。延徳二年足利義政薨去の後、天下いよいよ物騒がしく、小田家との戦起こる。近忠は井田郷にて待ち受け、寺田の武名を末世に伝えた。明応六年七月廿日、家督を長近ながちかに譲る。長近も、父近忠存生のうちに、嫡子延忠のぶただに家督を譲り、道閑と法号。近忠は明応九年八月十日卒去。

その頃、三河・駿河・遠江を守護する今川氏親うちかは、三州を寺田家に切り従えられていることを憤り、長親父子を懲罰せんと、相州小田原の北條早雲に命じ、一万余兵を以て、文亀元年九月初旬に戦に及ぶ。長親入道道閑は駿河勢を打ち破り、東三河は悉く寺田家に従う。しかし、子の延忠は酒色に耽り、奢り極めること甚だしく、藩下の諸士も小田・今川両家に下ること夥しい有様で、家臣評議に及ぶ。

〔三編下巻〕 延忠の嫡子次郎三郎清安は、未だ十三歳だが家督を継ぎ、離散せし者も帰参に及んだ。しかし、岡崎城留守居常盤まさやすは、逆意を示す。大永四年二月初め、清安は大久保忠かつを召し、まさやす征伐を告げるが、忠かつは諫めた。五月廿八日風雨激しき折、今宵征伐と忠かつ言い、まさやすの領する山中・岡崎を墮とす。まさやすは娘を清安に奉る。このことで西三河の諸士、悉く清安に就くことになる。

清安の叔父桜井内膳信定のぶただは長近の三男。元来佞奸邪知の人物で、清安の所領を奪おうと目論んでいる。天文四年三月上旬、清安は尾張小田信秀を討ち滅ぼすため発向し、清洲城を焼き払う。小田信秀軍議の折、信定を利用すること



田信秀、かねての約束を信定に言うが、譜代の諸士が従わないことを信定は言い立て、密かに仙喜代を害さんとする。  
 (四編上巻) 天文五年如月の初め、小田信秀は八千の兵を三河に押し寄せ、信定は寝所に行くに、守役阿部正なりは、一門の  
 を大将に、近習の面々打出でる。その夜密かに仙千代を殺そうと、信定は寝所に行くに、守役阿部正なりは、一門の  
 阿部四郎兵衛に守居させ、事なきを得た。仁木黨助嫡子林東四郎、注進に及び、四十余人討死の果てに勝利したこと  
 を告げる。内膳信定は案に相違し退く。信定は道閑公の御前に至り、四郎兵衛が私の存意で奥殿に居るのは仙千代を  
 侮るゆえとし、城中追放に及ぶ。信定は譜代の武士を郎等の如くあしらうなど増長し、仙千代を亡き者にし所領を奪

になり、密かに内通する。信定、病と称し戦の陣を離れる。清安は懲らしめようとすが、阿部大蔵正なり諫める。清安、信定を捨て置き、尾張の森山に陣を構えた。妬みあるいは敵の奸計からか、大蔵正なりは子てから信定と一味で今度の信定攻めを阻止した、との風説が陣中に起こる。清安は疑心生じ、正なりを遠ざける。正なり、子の弥七郎に身の潔白を語り、文を授く。天文四年十二月、陣中にて清安の馬取り放たれ、捕らえんとの下知を聞き、自身を捕縛と弥七郎悩乱し、村正を抜いて斬りつけ、清安死去。この時うゑむら晋六、弥七郎を殺害。譜代の面々、父正なりを虜にしようと、彼の陣中に馳せ至るに、正なりは自ら縄をかけ、岡崎へと連れ帰られる。信定は、自身の企みを押し隠し、道閑公の御前に参り、小田家に一味し国を奪おうとする阿部父子の企てと讒言する。家督を十一歳の仙喜代君に定め、後見を信定と決める。正なりの詮議の時、弥七郎遺骸より起請文出て、疑いは晴れる。正なり自害を試みるが道閑に留められる。小

おうと企む。

阿部正なりは、このまま幼君を置くことを憂慮し、天文七年弥生半ば、伊勢国神戸の清安姉婿東條持ひろの許に若君を連れ行き、時節を待つて帰国させようとする。十三歳にて仙千代元服し、寺田広忠と名乗る。持ひろ亡くなり、養子吉良よしやす心を変じ、広忠を生け捕り、小田家の恩賞を蒙ろうとする。持ひろが慈しんだ足軽が、よしやすの逆意を告げるに驚き、追手迫る中、三州長篠の岩四郎の漕ぐ舟に救われる。岩四郎は天照神の夢想により救ったことを語る。

〔四編下巻〕 それより遠江の国に至るに、折からの長雨に人家の軒先で雨宿りする。声を掛けてきたのは正なりの家で以前奉公のお梶であった。お梶の嫁する鍛冶屋の高塚五郎兵衛の許に逗留。広忠を預け、正なりは一人駿河に到り、今川義基の勇臣朝比奈駿河守の館に赴き、桜井信定の逆意を述べ、広忠への助力と、信定を討ち滅ぼし、本領を安堵すれば幕下になることを願う。義基は承諾。大蔵正なりも悦び、当国に帰る。留守中、一人の覆面武士が様々に広忠の処へ物を持参。対面するに阿部四郎兵衛であった。四郎も夢に大神宮のお告げを蒙り、日毎に守護していたという。三人で駿府に到り、義基に対面。この時広忠十五歳。広忠は三州もろの城に移り、吉良の城攻めで功をたてる。桜井信定、このことを伝え聞き驚く。譜代の面々も信定に背き、天文十一年水無月に、広忠は岡崎城に帰還を果たした。信定は道閑公の処に逃げ込み命乞いを願う。道閑の計らいで命ばかりは許される。

朝日の昇る勢いの広忠は、天文十年、刈屋城主水野忠政の娘臺うぶたいの方を娶る。鳳来寺の峯の薬師の示現により、天文十一年壬寅年十二月廿六日、徳若丸誕生する。

〔五編上巻〕 三河伊田郷に住む翁が、松に添えた黄金の短冊を持参。そこには伊田八幡の歌一首「神々のながきをまもるとくみへて幾代を松の若緑哉」があり、意を聞こうとして広忠は夢から覚めた。次の日、大浜称名寺の其阿上人に語るに、目出たき夢と解す。水無月半ば、舅の刈屋城主水野忠政長子下野守信元のぶもとが小田家へ一味なし、寺田家へも

使者を送り、小田家に加担するよう求めてきた。阿部・石川・大坪・赤根などの諸士と相談するに、是までの今川家の恩顧を言い諫める。徳若三歳。広忠は奥に参り、臺の方に話をし、信元の心を和らげるためにも離別となり、早速刈屋へ送る。

〔五編下巻〕警固を立てて刈屋に送るに、臺の方は、岡崎と刈屋の境にて皆に帰るように言う。臺の方の仰せに違わず、信元は三百ばかりの兵をおくり、送迎の者を討ち取らんと馳せ来たつた。供の居ないを怪しみ、追いかけようとするが、臺の方に諫められ、刈屋へと行く。事の次第を聞いた信元は、広忠への面当てに臺の方を再縁させる。広忠も戸田弾正憲光の娘を娶る。戸田の娘との再縁を祝す酒宴で、能狂言が余興として催された。ここに、当家の旧臣なる岩松鉢弥はちやという者、片目故に片目鉢弥との異名を持つが、いつしか刈屋の水野信元と内応し、広忠をつけ狙っていた。演じ終わり、小田信秀に内通する者から諸士が岩松を嘲っていたと告げられる。岩松怒り、武門の恥辱、世の嘲りを晴らそうと、広忠の寝所に忍び入り、村正の小脇差で頸搔き落とそうしたが、目を覚まされ、広忠の腿の辺りを傷つけ逃げるのみであった。うゑむら晋六は、岩松と取り組み、堀のうちに墜ちる。晋六の命に従い、藏人信孝が槍で二人取り組んだ儘で仕留めた。そもそも常盤藏人信孝は、広忠の叔父で、勝手に所領を増やすなど目に余るふるまいであったが、広忠は、日頃の忠に免じていた。さて、子息弥七郎が主君を弑したるにもかかわらず、上座することを目頃から不快なりと信孝が譏るのを聞き及んだ阿部大藏は、このように人々の領地を無理に奪う信孝の方が、前の桜井内膳に等しき行いと憤り、酒井・石川・本多と衆議し、信孝を放逐しようと謀る。また天文十四年九月、広忠は信定の子、常盤内膳清ただの反逆に対し、上野の城を攻め降参させる。

〔六編上巻〕天文十六年春の初め、奥河広忠おくがは、叔父の藏人信孝を今川家に遣わした。岡崎の老臣石川・本多・酒井・うゑむ村は、広忠に対し、前の桜井内膳に異なる事なき逆意を信孝が企てるに違いないと訴える。広忠も同意し、信孝を改易。様々に嘆願したが仕方なく、信孝は駿府に赴く。今川義基もあわれみ、老臣たちを諭すが、そのままにな



る。信孝、小田家に属する。天文十六年十月十九日、小田備後守率いる尾張勢、三州に乱入。時に広忠は、上和た和たの常盤忠倫が、一族を捨て小田信秀に組したるを憤り、近臣かひぢ寛平三郎重忠を召し、密かに忠倫を討つてくるよう命じる。平三郎は弟まさしげに語り赴く。城中に忍び入り、忠倫殺害。槍責めにて危うき時、弟まさしげの助太刀により脱出する。かくて寛兄弟は百貫文の地を恩賞として授かる。小田信秀、忠倫の死を聞き大いに驚き、奥河家を亡ぼさんと砦を築くなど準備する。広忠、この年頃、今川家によしみあるを以て、援軍を乞うに、今川義基、人質を申し受けようとする。広忠、嫡男徳若丸を駿府に送ることにする。

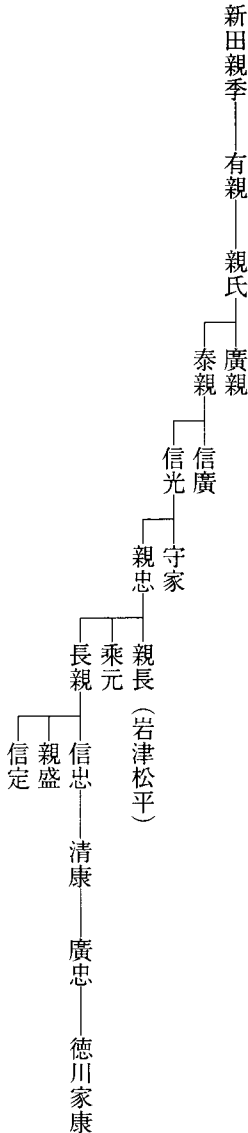
〔六編下巻〕 駿府への途次、田原城主戸田弾正憲光（山本註―五編巻中略目では綱光）は、潮見坂に飯屋を設け、徳若丸を迎えようとするが、弾正ならびにまさみつ父子は示し合わせ、尾張の信秀に使者を立て、徳若を奪い小田家へ連れて行くことを約束する。信秀、巧くいった暁には東三河を戸田氏に渡す旨言い、証物として永楽銭五メ文（註―五編では五拾貫文、六編口絵には五貫文、メ＝緘）を授ける。岡崎の旧臣森しん八は、今は信秀家臣に仕える身だが、戸田家より言い寄越せしことを密かに聞き、妻のみき女を呼び、戸田の奸計を告げに走らせた。しかし、石川に対面すれど信じてもらえない。一方、田原では戸田弾正父子は供人を欺き、船にて徳若丸を送らせるよう仕組む。出立後、小田の軍勢帆を開いて攻め寄せる。陸にあがり、熱田大宮寺で休息となる。徳若の供、天野又五郎は十一歳。下部を呼んで、密かに岡崎に告げ知らせる。伝え聞いた広忠は憤り、戸田父子の非議を怒りつつ、奥へと行くに、弾正娘である広忠後妻は、自身も関わりあるかと思われるを嘆き、自害しようとする。広忠は駿府に石川安芸守きよかねを遣わし、今川を裏切らぬことを告げる。義基は謝し、出陣。小田信秀はしきりに勧誘するが、広忠は断固拒絶する。以下、六編二十丁裏に第七編予告文あり、「○第七編は徳若尾州に囚われとなりての艱難、信秀残忍にして徳若丸を苦しむることより、小田信長の生い立ち、引き続き出板仕候」。

典拠追補

先章でまとめた梗概を踏まえつつ、確認していきたい。

『松飾徳若譚』は、三河松平徳川氏の祖、寺田有近・近藤「新田有親・親氏」の代から、泰近「泰親」・延満「信光」・近忠「親忠」・長親・延忠「信忠」・清安「清康」・広忠・徳若丸「竹千代」こと徳川家康の幼き頃に及ぶ、徳川祖歴代記となっている。徳川家吉例の元旦兎の吸物の由来や、有近・近藤が遊行上人となつて諸国遍歴したこと、小田「織田」・今川両家との戦、天文四年（一五三五）十二月に清安が森山にて横死を遂げた通称「森山崩れ」、一族の信定の姦計から逃れるため仙千代（のちの広忠）が一旦伊勢国に立ち退いたこと等々を織り交ぜ、家康前史を語るに四編に及ぶ。以後、徳若丸母離別のこと、父広忠災難のこと、竹千代人質のことなど家康に関わるエピソードを語り、六編にて中断している。参考までに関連する徳川（新田）家の畧系図を掲げておく。

〈参考〉 徳川家畧系図



こうした歴代記の素材について、従来の研究では次のような指摘があった。  
 そんな魯文なればこそ、同じ明治四年に、『松飾徳若譚』と題する田辺南竜の講釈ダネによる大時代な草双紙も刊行していた。  
 冒頭にも掲げた興津氏の言である。こうした見解には相応の事由がある。本作第四編序において、魯文自らが語っているのである。



余が當世史を著述する。起原は、牛久保主水。南龍ぬしが軍談の切を聴たる張扇。それが乗地の種本を。其儘生捕注文なりしが。僅作意も混へずば。婦幼童蒙に興なからんと。当編からは根の遂ぬ。実録から出た虚妄方便。嘯くといふ口絵の虎が。抑ほらの濫觴にて。千里を走る評判は。覺束なくも看官を。呼子鳥てふ意にて。絵組にあしらふ猿まろに。三本足らぬ毛作者だましひ。脚色は小牧の小説風調。末長久手のものがたりを。お目長篠に御高覧と。味方が腹も同意なる。画工梓主も侶俱に。翼ふは御代の徳若草史。追々次編のうりだしを。関がはらより著体も。難波戦記のよしあしを。わかつにいとまなつ御陣。千秋萬歳まん／＼ぜい。お家も市もさかゆるまで。御見すてなくおんもとめを。呉竹のふして白す

明治四未歳新板発兌 仮名垣魯文誌

そのまま受けとるならば、魯文がこの『松飾徳若譚』を著述したのは、長年関わりある青盛堂加賀屋吉兵衛主人が観音詣での帰途、田辺南竜の講釈

を聞き、その内容そのままに戯作者述するようにとの注文があったことになる。たしかに青盛堂からは、魯文作として『当九字万成會我』三編六冊、『薄緑娘白浪』六編十二冊などを既に発兌しており、旧知の関係であった。また講談を素材とすることも、『薄緑娘白浪』で「此稗史は。友人松林亭伯円大人が。每席定連の耳を歛ばし。何処にても大入なせる。笠松鬼神の講談を。其儘仮用つもりなりしが」(初編序)と、その利用を企てんとしたこともあった。今日まで、同様の作品として『松飾徳若譚』も位置づけられてきたのも無理からぬ処であろう。

では実際のところ、どうなのだろうか。「僅作意も混へずば。婦幼童蒙に興なからんと。当編からは根の透ぬ。実録から出た虚妄方便」(四編序)との発言が何よりも気になる。今少し、「当編から」変更の加わった「実録から出た虚妄方便」の存在を考えてみてもよいのではないか。手がかりは魯文の発言に求められる。試みに六編までの序文から抜萃してみる。傍線は合戦の、波線は作品名を彷彿とさせるものである。

初編…「先当編を三河記や。僅は種も在原が。東下向の名勝古跡」

四編…「脚色は小牧の小説風調。末長久手のものあたりを。お目長篠に御高覧と。味方が腹も同意なる」  
「関がはらより著体も。難波戦記によしあしを。わかつにいとまなつ御陣」

六編…「さるにても大須賀が述ると偽る。彼家の歴代記。平岩が名を仮りし参河後風土記及び。その余の偽書の妄説を。筆の掃木に除捨て武徳編年集成の。正訂きを採る実録に」

秘書の類を纏めた近世後期の摺物の一つに『群書諸説／写本目錄考』(東京大学総合図書館蔵)があり、そこには「武徳編年集成」「後風土記平岩本」「同正説大全」「同増補」「三河記」「難波戦記大全」などの書名が列挙されている。当時、こうした写本は多く流布していた。序に挙がる書目を管見に及ぶ限りで確認してみたところ、かなり細かい点まで『松飾徳若譚』の『三河後風土記』利用が確認できる。

諸本間の異同までは今は問わない。広範にわたるため、便宜上、成島司直改撰『改正三河後風土記』(確認したのは

『物語日本史大系』第九卷「大閤記下／三河後風土記」・早稲田大学出版部・昭和三年九月刊の目次を列举し、『松飾徳若譚』に相応箇所ある場合には「・」、「ほとん」と対応箇所ない場合「×」で示しておく（「」内は補記）。

卷第四

※有親君・親氏君諸国御経歴の事

※有親・親氏両君為時宗僧、附林藤助光政兔吸物の事

※親氏君坂井郷御男子出生、附松平郷御転居の事

※親氏君斬取諸郷の事

※菅沼定直帰順の事

※林家系図

※酒井左衛門尉家系

※酒井雅楽頭家系

卷第五

※泰親君御家督、附両本多為御家人事

※信光君御家督附、攻拔安祥城、并葵御紋の事

※親忠君御家督、附石川氏由緒の事

※親忠君御子、附榊原氏由緒、并井田郷軍大樹寺御建立の事

※親忠君大樹寺御寄進御文書の事

※長親君御家督大樹寺制令、附大久保氏由緒、并今川勢岩津城下軍の事

●〔初編〕

●〔初編〕

●〔二編〕

●〔二編十四丁前後〕

●〔二編二十丁前後〕

×

×

×

●〔三編上〕

●〔三編六丁前後、但し葵御紋関係×〕

●〔省略多し〕

●〔三編〕

×

●〔三編八丁前後〕

卷第六

- ※三葵御紋御治定、附酒井酢漿紋、并戸田宗光帰順の事
- ※信忠君御家督、附石川忠輔元服、并大浜御隠居の事
- ※清康君御家督、附攻岡崎山中両城、并昌安入道息女御婚姻の事
- ※清康君北方の事
- ※吉田川合戦牧野兄弟討死、附三河国士降参の事
- ※尾州岩崎野呂城攻の事
- ※宇理城軍松平右京亮親盛討死の事
- ※松平大炊助忠定武功の事
- ※武田信虎使者、附大樹寺制札の事
- ※清廉君御横死の事
- ※阿部大蔵赦免、附三州井田郷合戦の事
- ※内膳正信定姦計、附仙千代君勢州御立退の事
- ※阿部四郎兵衛霊夢の事
- ※阿部大蔵催促味方、附広忠君駿州御下向の事
- ※広忠君三州牟呂御入城、附吉良西條落城、并信定要盟の事
- ※広忠君岡崎御帰城の事
- ※内膳正信定降参の事
- ※織田信秀安祥城攻左馬助長家討死の事

- 〔三編九丁前後但し葵御紋関係×〕
- 〔三編上〕
- 〔三編下〕
- 〔三編下 森山崩れ〕
- 〔四編上〕
- 〔四編五丁、九丁前後〕
- 〔四編十丁〕
- 〔四編〕
- △〔無くても可〕
- ×
- ×
- ×
- ×
- ×
- ×
- ×
- ×

卷第七

- ※竹千代君御誕生、附御母君御離別の事
- ※竹千代君御兄弟、附御母君御再縁の事
- ※広忠君御災難、附片目八弥の事
- ※酒井将監忠尚反逆、附藏人信孝改易の事
- ※三州清縄手、并渡理河原軍の事
- ※寛平三郎刺殺松平三左衛門忠倫の事
- ※竹千代君人質の事
- ※三州小豆坂軍の事
- ※三州大明寺村合戦、附藏人信孝討死の事
- ※山中落城の事
- ※広忠君逝去、附岡安祥両城軍、并竹千代君人質替の事
- ※神君御官位次第の事
- ※尾州蟹江城攻七本鎗、附神君御元服の事
- ※駿州石打、附大河内孕石の事
- ※三州日近城軍、附同国福谷砦合戦、并神君岡崎御帰城の事
- ※三州寺部広瀬拳母梅坪伊保軍の事
- ※尾州石瀬合戦、附科野城軍松平信一夜討の事
- ※信康君御誕生、附是字占の事

- 〔四編二十丁〕
- 
- 〔五編〕
- 〔六編〕
- 〔六編上〕
- 〔六編六丁〜十丁〕
- 〔六編下 ここまで〕

※織田信長籠兵于諸城の事

※大高城兵糧入の事

※今川義元尾州発向、附鷲津丸根落城の事

※信長出陣、并熱田社願書の事

※桶狭間合戦、附今川義元討死の事

※神君大高城御退去の事

各章立の利用に軽重の度合いはあるにせよ、物語の構成は『改正三河後風土記』の配列にほぼ準じるものとなっている。『改正三河後風土記』が取り上げるちよつとした逸話がそのまま『松飾徳若譚』に取り上げられていることも多い。何が採られ、何が除かれているか。系図に関わる記述や家臣に関わる話は本紀から外れるため除外されている。また、葵の御紋に関わる逸話は、意図的に外されているとして良いだろう。勿論、序文等の発言内容を考えるならば、講談との繋がりも考慮しなくてはなるまい。例えば、初編九丁表からの熊退治の場面などは、『改正三河後風土記』にはなく、語りのなかでこそ生きてくるのだとも思う。しかし『改正三河後風土記』からの直接的な影響関係は、かなり細微に渉る場面でも確認しうることを指摘しておきたい。具体的に一・二例を挙げておこう。

A 『松飾徳若譚』四編上下梗概より

持ひろ亡くなり、養子吉良よしやす心を変じ、広忠を生け捕り、小田家の恩賞を蒙ろうとする。持ひろが慈しんだ足軽が、よしやすの逆意を告げるに驚き、追つ手迫る中、三州長篠の岩四郎の漕ぐ舟に救われる。岩四郎は天照神の夢想により救ったことを言う。それより遠江の国に至るに、折からの長雨に人家の軒先で雨宿りする。声を掛けてきたのは正なりの家で以前奉公のお梶であった。お梶の嫁する鍛冶屋の高塚五郎兵衛の許に逗留。





a 『改正三河後風土記』卷第六「内膳正信定姦計附仙千代君勢州御立退  
の事」本文抜萃

持広の死後は養子上総介義安志ヨシヤスを変じ、織田家へ内通し、此君を檣にし  
て信秀方へ渡さんと計略す、大藏是を聞いて大に驚き、再び君を供奉し神  
戸の城を逃出で三州長篠に來り、其地の郷民を頼み舟を求め遠州鍛冶が家  
に落着かせ給ふ、此間の御艱難筆にも詞にも尽し難し：

B 『松飾徳若譚』六編下梗概より

岡崎の旧臣森しん八は、今は信秀家臣に仕える身だが、戸田家より言い寄  
越せしことを密かに聞き、妻のみき女を呼び、戸田の奸計を告げに走らせ  
た。しかし、石川に対面すれど信じてもらえない。一方、田原では戸田弾  
正父子は供人を欺き、船にて徳若丸を送らせるよう仕組む。

b 『改正三河後風土記』卷第六「竹千代君人質の事」本文抜萃

いふ人なし。編年憲光に作る、是も誤り也。憲光は永正十年十一月朔日卒す。神祖御継母君の父は康光なり、今  
改むは廣忠君の当時の北方の御父也、此由緒もあり陸地は敵地多ければ、舟にて送り申さんとて、西郡より吉  
田へ伊東記へに入せ給ふ。今川家よりも御迎として飯尾勘助此所迄参り向ふ。時に康光が子五郎政直は、俄に心  
を変じ織田家へ内通し、塩見坂に伏兵を置き、御供人を追散し、竹千代君を奪ひとる。御供の輩も随分と戦ひけ  
れども、大勢に小勢なれば与三右衛門正房を始め数人討死すへ伊東記には戸田塩見坂に飯屋を設て御馳走申し、  
田原へ御供申したり、此時森平太と云ふ者実事を告しかど御供人信ぜず、翌朝に至り戸田たばかりて熱田へ送る

と記す。…

とりわけBbにみるように、『改正三河後風土記』で、「伊東記」から補われた森平太の逸事までもが、『松飾徳若譚』六編十二丁裏から十五丁裏まで、相応の紙数を割いて語られている。こうした逸話をも拾い上げている点は、直接的な文言での流用ではないにせよ、その作品構想の背景に『改正三河後風土記』の存在を考えざるを得ないのである。

### 史伝標榜—おわりにかえて

「常盤の松の色変ぬ。公が功業を幼童等に。知らせまほしき老婆心に。此徳若の物語」(六編序)と、魯文は述べていた。徳若丸の登場は四編巻末からであったが、その前史としての記述—新田有近からの歴代—に及んでいるのは初編からの四編に他ならない。明治黎明期に、徳川氏の祖のことを詳細に描いたものとしてはかなり早い刊行であり、先鞭をつけたと言っても良いのではないか。「読切一代記物」(品川屋久助広告)「絵本一代記物」(武川清吉広告)などの一代記ものが幕末頃から盛んに刊行されるが、そのなかでも歴代に及んでいる点は注目してよいだろう。歴史の断片を切り取るのではなく、歴代の盛衰を語ろうとするその姿勢は、合戦や、徳若丸こと家康のみを焦点化した他の作品に比して、時にはぶつきらばうな程にまでことがら本位で展開をしていく。一例を示そう。

長享二年七月廿二日、八十五歳にて逝去あり。この延満は極めて子福者にて、男女の子四十八人と言ひ伝へ、家督を次男寺田次郎三郎、のちに左京亮近忠に譲られたり。近忠穩和にして、よく民を恵み、父祖の業を全うせしが、その頃は延徳二年足利將軍義政薨去の後、天下いよく騒がしく、諸国の武士穩やかならず。このとき尾張の小田家より三河の国へ軍兵を差し向けて戦ひを挑みけるにぞ。近忠朝臣、かくと聞くより急ぎ軍兵を催促ありて、井田の郷に敵を待ち受け、寄せ来る小田の猛勢をあまた討ち取り追ひまくり、千人塚を築き立て、当家の

武勇を末世に残せり。かくて近忠、明応六年七月廿日、家督を息男二郎三郎長親に譲られ、その身は隠居せられ、長近（親）朝臣、御父近忠入道西忠存生のうち嫡子次郎三郎延忠に家督を譲り、その身は剃髪ありて道閑と法号あり。かくて近忠入道は同九年八月十日卒去ある。

任意に漢字を宛て、『松飾徳若譚』三編七丁裏からの本文を抜萃してみた。近忠（改正三河後風土記）では親忠君）について述べた全文である。幼童のために「史実」―勿論それは、当時知りうる「実録」の類であつたが―を伝えることを標榜する限りにおいて、何時家督が譲られたのか、何時亡くなったのかはとりわけ重要だつたのだから。このように、登場人物も多く、次から次へと展開していく話よりは、典拠たる『改正三河後風土記』からかけ離れず、荒唐無稽なところもなく、徳川累代の系譜を語り伝えようとする執筆姿勢と見なしてよいのではなからうか。特徴ある本文を提供しているわけではない。時に「それはさておき」と読本調に場面を転換することがあるばかり。その姿勢は、魯文が従前書き続けた抄録本に等しいもので、時には暗殺未遂や暴君ぶりまで語られているのである。ただ繰り返しになるが、一代記にとどまらず徳川歴代に及ぶ系譜を記そうとした点、長編合巻にもなりうる作品構想の可能性を積極的に認めたいと思う。

さて、『松飾徳若譚』は六編で中断した。恐らく七編以降の刊行はなかつたろう。一つには徳若丸こと竹千代が人質となつて以後の逸話は、既に読者にとつても既知の事柄に属していたと想像されること。もう一つには、そうした原動力の一つでもあつた講釈などでも、明治七年という段階では、徳川のことを語るに時代遅れになりつつあつたらである。

劇にて動もすれは徳川家の故事を演する等作者の智囊余りに空なることを知る前代の興亡は戯作者流の種子なれと今日之を演するは甚拙し

（報知新聞明治七年七月二十八日記事・吉沢英明『講談明治編年史』より抜萃。）  
その背景に、明治五年四月の「三条の教憲」のことを想定することもあながち無意味ではあるまい。いち早く、語

られざる「歴史」としての徳川前史を版行に付した『松飾徳若譚』であったが、その新しみも色あせる程に、時代の潮流は物語を書き継ぐことを許してはくれなかつたのである。指摘に終始した。「ノート」と称する所以である。

【補記】本稿は、国文学研究資料館プロジェクト「開化期戯作の社会史的研究」、ならびに科学研究費補助金基盤研究（B）「原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究」に基づく研究成果であり、プロジェクト研究会（平成十七年一月八日 於・学術総合センター）での口頭発表『松飾徳若譚』に関することども」の一部を礎としている。研究発表の場においてご意見をたまわつた方々に深謝申し上げます。